九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ヤマトと沖縄のはざまで ： 山之口貘と沖縄（２）

松下，博文
筑紫女学園短期大学教授

https://doi.org/10.15017/9426

出版情報：語文研究. 79, pp.22-36, 1995-06-04. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

ヤマトと沖縄のはざまで

――山之口貘と沖縄(2)――

松下博文

I　本稿の目的

故郷沖縄を山之口貘は如何に見ていたのか、また沖縄から如何に見られていたのか、こうした問題について、実作に即した詳しい解読作業は従来意外となされていないようだ。

よってここでは、日本への復帰運動があたらしい段階を迎えた一九五五年前後と三十四年ぶりに帰郷する同五八年の二つの時期におよその焦点を絞り、その内実に迫って見ようと思う。この両時期を考察の対象に選んだ最大の理由は貘におけるヤマトの問題、または沖縄の問題、あるいはヤマトと沖縄のはざまでゆらいでいる貘の姿がおそらくこの時期にもっとも鮮明に現れているのではないかと思っているからである。

あるいはまた、こうした問題がおよそ詩人山之口貘を論じる場合の大きなネックになるのではないかと考えているからでもある。ただ、展開上、三〇年代に書かれた「会話」も考察の対象に入れることにした。

II　「沖縄問題解決国民総決起大会」のはざまで

五〇年代中期の世界の情勢はとくに軍事基地の問題で緊迫していた。たとえば、英米の基地を保持していたフィリピン、セイロン、キプロス、アイスランドでは軍用地問題や民族問題等で内外が動揺していた。沖縄もまたそうした渦中の只中にあった。こうした中、五六年七月四日、アメリカの独立記念日にあわせて東京の日比谷新音楽堂で「沖縄問題解決国民総決起大会」が開かれた。

大会の主目的は米国からの施政権の返還、土地四原則の貫徹、あるいは前月六月に発表されたプライス勧告への反対等を党派をこえて日本政府につよく要請することにあったが、ここには沖縄から沖縄民主党幹事長新里全福、社会大衆党委員長安里積千代、無所属議員代表知念朝功、真和志市長翁長助静ら四人の代表が参加し、他に、大会のためとくに、沖縄青年連合会事務局長仲宗根悟、沖縄教職員会長屋良朝苗、沖縄婦人会代表仲井間八重子の三人もかけつけた。

全国的に注目されたこの大衆運動をたとえば当日の「朝日新聞」

夕刊は〈沖縄の女性はこう訴える　空路かけつけた仲井間さん〉という見出しと〈各国へ『要請文』決議　沖縄問題国民総決起大会〉という見出しとで大きく報道した。[1]

むろん貘も、こうした事態にするどい反応をしめすことになる。同年九月号「現代詩」に掲載された「詩人は沖縄をどうみるか」[2]という金子光晴、貘、許南麒による鼎談中に次のような発言が見られるからだ。

《この間沖縄から代表が来ましたね、土地問題の関係で。その代表が来たときでもそうですが、新聞紙上で、政府の上の人たちが沖縄に関係のあることに対してものを言う場合に、何かやっぱり他人事みたいなんですね。(略)国際的な法律的な眼だけで見たら、いまの重光外相みたいに『潜在主権はまだ侵されないからなんにも言うことはできない』という態度をとられるだろうが、それは法律的にだけ沖縄を見るからそうだが沖縄の問題は、法律的にだけ見てすませるものだろうかと云いたい。(略)これは必ずしも政治という分野に限らず、それらのものを包含したもっと大きな人間の問題じゃないかとぼくは思うんです》。

この発言から読みとれる事項は貘が沖縄問題を政治的法律的問題としてとらえるのではなく深く「人権」にかかわる問題としてとらえようとしていたということである。そしてそれは沖縄問題があらたな大衆運動としてその理念を確実に変換しつつあったことをも意味していた。

大城立裕『同化と異化のはざまで』によれば復帰運動の理念は(1)素朴ナショナリズム、(2)人権回復、(3)自治権拡大、(4)反戦平和の四つのプロセスを経て展開されたという。[3]鼎談が行われたこの時期はいわば(2)の理念によって復帰闘争が闘われていた時期であり、実際、六月二十八日、「総決起大会」のために入京した沖縄住民代表団の一行が総理官邸に根本官房長官、外務省に重光外相を訪問したとき根本長官がしめした〈沖縄問題は日本民族の基本的人権に関する人道上の問題である〉という日本政府の公式発言は、[4]こうした時代要請を明快に告げていると断じてもよい。

すなわち貘もこうした動きに連動しつつ沖縄問題を表面的社会問題としてとらえるだけでなく深く「人権」の問題として把握していたのであった。こうした実態はおそらく次のような統計からも補強できるに違いない。

たとえば、思潮社版全集に収録された発表総数を年次別に算出して見た場合(発表年次不詳の作品が多数のため詩篇は除く)、沖縄に関する関係文章が五一年の対日講和会議から五三年の平和条約発効にかけて急激に増加していることが理解されるが、中でも、発表数がもっとも著しくなるのが五六年であるという事実や(資料Ⅰ参照。この年は前年にくらべて作品数で約二倍、その半数ちかくがいわゆる「沖縄問題」についての発言である)、六月のプライス勧告に敏感に反応するかの如く七月三日号「読売新聞」に「梯梧の花」を発表し、つづいて、日比谷の「決起大会」に呼応して「第三日曜日」「沖縄の叫び」「沖縄悲歌」「気にかかる沖縄」等のきわめてトーンの高い文章を発表している事実等は(資料Ⅱ参照)、こうした時期、貘が如何に「問題」につよい関心をいだいていたかを鮮明にしめすものであろう。

〔資料Ⅰ〕　年次別作品発表数年表（詩篇はのぞく）

年次	数	沖縄	評論	随筆	小説	童話	児童詩	（私生活）	関連事項（社会動向）
1937年	4		3	0	1	0	0	・12月結婚。	
1938年	1		0	0	1	0	0	・8月『思弁の苑』刊行。	
1939年	5	①	0	4①	1	0	0	・6月東京職業紹介所に就職。	
1940年	1		0	0	1	0	0	・12月『山之口貘詩集』刊行。	
1941年	3	①	0	2①	0	0	1	・6月長男重也誕生（翌年死亡）。	
1942年	0		0	0	0	0	0		
1943年	3		0	0	1	0	2		
1944年	1	①	0	1①	0	0	0	・3月長女泉誕生、12茨城に疎開。（1948年まで）	
1945年	0		0	0	0	0	0		・6月日本軍壊滅、沖縄戦終わる。
1946年	0		0	0	0	0	0		・1月GHQ覚書により北緯30度以南の諸島日本から分離。
1947年	0		0	0	0	0	0		
1948年	2		1	1	0	0	0	・3月職業紹介所職職、7月一家上京し月田家に間借り文筆生活に入る。	・7月琉球の通貨B円に統一。
1949年	3	①	0	3①	0	0	0		・10月琉球米軍政長官にシーツ少将就任。
1950年	12	③	2	7①	3②	0	0		・6月朝鮮戦争開始。12月琉球列島米国民政府に関する指令。
1951年	12	②	3①	1	5	3①	0	・6月母カマト死去。	・4月琉球日本復帰促進期成会結成。9月対日議和会議。
1952年	5		1	2	2	0	0	・西武デパート沖縄展に出席、琉舞。	・4月琉球政府発足、対日平和条約、日米安保条約発効。
1953年	12	⑥	4③	7③	0	0	1	・4月父重珍死去。	・4月土地収用令公布。12月奄美返還。
1954年	12	④	1①	10②	1①	0	0		・1月ア大統領基地無期限保有を宣言。4月立法院「軍用地処理に関する請願」（土地四原則）可決。
1955年	15	⑥	5③	4③	0	0	6		・1月朝日新聞「米軍の『沖縄民政府』を衝く」。9月由美子ちゃん事件。10月プライス調査団訪問。
1956年	29	⑫	8⑦	10③	1①	1①	9	・6月プライス勧告発表、軍用地四原則貫徹住民大会。7月沖縄問題解決総決起大会（東京）。12月那覇市長に瀬長亀次郎当選。	
1957年	24	⑨	9⑦	9①	2①	1	3		・11月瀬長追放のための改正布令公布。
1958年	16	④	3	11③	1	0	1	・10月末沖縄に出発、11月帰郷。	・9月通貨のドル切替え。
1959年	18	⑮	12⑫	6③	0	0	0	・1月沖縄より帰京。	・1月祖国復帰促進県民大会。
1960年	21	⑫	11⑧	10④	0	0	0		・4月沖縄県祖国復帰協議会結成。
1961年	15	⑧	4④	10④	1	0	0		・6月池田、ケネディ共同声明。
1962年	10	⑦	4④	5③	0	0	1		・3月ケネディ大統領、沖縄新政策を発表。
1963年	4	②	1①	2②	0	0	1	・7月19日死去、享年59歳。	・3月キャラウェイ高等弁務官、自治権神話説を述べる。
未発表	1	①	1①	0	0	0	0		
総数	229	95	73	105	21	5	25		
比率		41%	32%	46%	9%	2%	11%		

※○内の数字は沖縄についてふれている作品数をあらわす。1956年を例にとって説明しよう。この年の発表総数は29編、沖縄関係文献は総数⑫、内訳は評論8編中⑦編、随筆10編中③編、小説1編中①編、童話1編中①編が沖縄についてふれた作品、トータルで⑫となる。

〔資料Ⅱ〕　沖縄関係作品年表（1939～1957年）

初出年月日および掲載誌紙名	作品表題	分類	内容
1939年11月号「歴程」	「満谷氏の『榕樹の蔭』と藤田氏の『琉球美人』」	随筆	●
1941年3月2日号「都新聞」	「スフについて」	随筆	
1944年10月25日号「東京新聞」	「那覇人」	随筆	㊫
1949年11月20日号「図書新聞」	「火野葦平『赤道祭』」	随筆	●
1950年2月号「新潮」	「無銭宿」	小説	●
1950年4月10日号「産業経済新聞」	「闘魚」	随筆	●
1950年9月号「群像」	「野宿」	小説	●㊫
1951年7月号「少年グラフ」	「空手ものがたりちょんまげのタルー」	童話	
1951年12月号「農林春秋」	「琉球の幽霊」	評論	●
1953年1月27日号「内外タイムス」	「『ひめゆりの塔』と沖縄調」	評論	■
1953年3月13日号「読売新聞」	「このごろ」	随筆	■
1953年4月2日号「報知新聞」	「池袋の店」	随筆	■
1953年5月号「新潮」	「祖国琉球」（沖縄問題に積極的に触れ始める）	評論	● ■ ㊪
1953年7月号「明窓」	「ある年の夏」	随筆	●
1953年9月号「おきなわ　31号」	「かじまるの木蔭」	評論	● ■
1954年8月18日号「毎日クラブ」	「山原船」	随筆	●
1954年9月号「電信電話」	「光子の縁談」	小説	㊫
1954年9月25日号「毎日新聞」	「暴風への郷愁」	随筆	●
1954年11月11日号「日本経済新聞」	「沖縄」	評論	●
1955年2月9日号「東京新聞」	「初恋のやり直し」	随筆	●㊫
1955年5月8日号「日曜新聞」	「沖縄と日の丸」	評論	■
1955年5月9日号「高知新聞」他	「沖縄を思う」	評論	㊫■ ㊪
1955年10月3日号「読売新聞」	「カラカラ」	随筆	●
1955年11月号「女学生の友」	「ふるさと沖縄を思う」	評論	● ■
1955年12月25日号「琉球新報」	「バズィル・ホール『航海記』読後感」	随筆	●
1956年3月8日号「産経時事」	「兄の受験」	随筆	㊫
1956年3月号「婦人朝日」	「ヤファラジューシー」	評論	●
1956年7月3日号「読売新聞」他	「梯梧の花」	評論	●㊫ ▲㊪
1956年7月号「小説新潮」	「酒友列伝」	随筆	●
1956年9月30日号「日本経済新聞」	「某月某日」	随筆	▲
1956年9月号「新潮」	「第三日曜日」	小説	■▲
1956年9月号「婦人画報」	「沖縄の叫び」	評論	● ■▲
1956年10月号「食生活」	「チャンプルー」	評論	●
1956年11月号「新潮」	「沖縄悲歌」	評論	● ▲㊪
1956年11月号「りぼん」	「しらさぎのおつげ」	童話	
1956年11月8日号「琉球新報」	「詩の島・八重山」	評論	㊫
1956年12月14日「産経時事」他	「気にかかる沖縄」	評論	■▲
1957年1月号「栄養と料理」	「正月の沖縄料理」	評論	●
1957年1月号「新婦人」	「黒美人小」	評論	● ▲
1957年2月号「ゆーもあー」	「アルバカ・ルバシカ」	小説	●
1957年3月号「高校コース」	「方言のこと」	評論	●
1957年6月13日号「東京新聞」	「豚のしっぽ」	随筆	●
1957年7月『子供どもにきかせたいとっておきの話』英宝社刊	「沖縄」	評論	■
1957年9月号「小説新潮」	「山羊料理」	評論	●
1957年11月号「新日本文学」	「霜多正次」	評論	
1957年12月号「園芸武蔵野」	「ゴーヤーの苦味」	評論	●

※内容によって、●回想（郷愁）㊫家族　■復帰問題　▲プライス勧告　㊪身分証明書　に分けて示した。

Ⅲ 「会話」の世界……ヤマトのはざまで

ただ、こうした敏感な反応が実際的に詩的表現としていったい如何に昇華され作品化されているのか、また、その完成度はどうなのか。結論からさきに言えば、むしろ、作品のトーンが高い分だけ、その実質は上滑りのようにも思える。つまり、作品構造におよそ本来の粘着力が見られないということだ。初期の作品、たとえば「会話」と比較するなら、やはりその構造の差は歴然としているように思えるからだ。そしてこうした作品の構造の単調さそのものの中に、実は、復帰運動高揚期における山之口貘の沖縄にかかわるスタンスの取り方の特徴がみごとにしめされているように思われる。

貘の詩作の特徴は、おそらく〝思考の肉体化〟〝自身の考えを血肉化すること〟という言葉でとらえていいであろう。例の伝説化されている凄まじいまでの作品推敲もこうした〝思考の肉体化〟の実際的な顕れと言ってよいが、こうした〝肉体化〟にみごとに成功したとき方法と内容が微妙に一致した「会話」の作品が生成されたように私には思えるからだ。

だが、この時期の作品にはこのような思考の肉体化現象は残念ながら希薄であると言ってよい。いわば、作品に思考のねじれがなく、感情そのものの世界に溺れているような作品が見られるからだ。おそらくそれは同じ沖縄をテーマにした「会話」とこの時期に書かれた「沖縄よどこへ行く」、あるいは、「不沈母艦沖縄」との内部構造を比較検討することによりおよそ明らかになろう。以下、その構造の比較検討を試みたい。

「会話」

お国は？　と女が言った
さて、僕の国はどこなんだか、とにかく僕は煙草に火をつけるんだが、刺青と蛇皮線などの聯想を染めて、図案のやうな風俗をしてゐるあの僕の国か！
ずつとむかふ
ずつとむかふとは？　と女が言った
それはずつとむかふ、日本列島の南端の一寸手前なんだが、頭上に豚をのせる女がゐるとか素足で歩くとかいふやうな、憂鬱な方角を習慣してゐるあの僕の国か！
南方
南方とは？　と女が言った
南方は南方、濃藍の海に住んでゐるあの常夏の地帯、竜舌蘭と梯梧と阿旦とパパイヤなどの植物達が、白い季節を被つて寄り添ふてゐるんだが、あれは日本人ではないとか日本語は通じるかなどゝ談し合ひながら、世間の既成概念達が寄留するあの僕の国か！
亜熱帯
アネツタイ！　と女は言った
亜熱帯なんだが、僕の女よ、眼の前に見える亜熱帯が見えないのか！　この僕のやうに、日本語の通じる日本人が、即ち亜熱帯に生れた僕らなんだと僕はおもふんだが、酋長だの土人だの唐手だの

泡盛だのゝ同義語でも眺めるかのやうに、世間の偏見達が眺める
あの僕の国か！
赤道直下のあの近所

朝鮮と沖縄の人々は、知られるように、かつて不当な処遇を受けていた。これはひとつの極端な例だが下宿に〈朝鮮人・琉球人お断わり〉の札が下がっていたこともあったという。この作品は従来まさにこうした虐げられた人々の、つまりは不当にあつかわれた人々の「したくない会話」「逃れたい会話」の世界をみごとに作品化したものであるとされてきた。言葉をかえれば、この作品は、ねじれた文体によって（屈折した文体によって、歯切れの悪い接続詞等によって）歴史的に差別されてきた沖縄民衆の民族的差別感や自虐的劣等感を、切実なリアリティをもって、作品の内側に封じ込めた作品であると言われてきた。[5] そして貘もまたおおくの自作解説でそうした見方を提示してきた。[6] だが、このような視点からの作品鑑賞はむしろ容易なことであろう。

こうした見方に異論を唱えたのが、岡本恵徳氏であった。氏はこの作品をたとえばこのような対社会的側面から読むのではなく、むしろ貘内部の根本的な問題として、つまり、《他者》と《僕》との《越えがたい溝》の問題として、さらに言えば内省的な自問の問題として、または、自己規定できない内なる「おきなわ」の問題として、その作品的意義をとらえ直そうとする。[7]

《「会話」では、主人公は「お国は？」と問われて「おきなわ」と答えることができず、「ずっとむこう」「南方」「亜熱帯」などと答える。それをそのまま主人公の劣等感のように読み取ることは可能である。多くの本で紹介されるように、事実沖縄出身者で、戸籍を東京に移して出身地をかくした人たちが多いというのだから、作者についての理解をぬきにして考えれば、そういう判断が出てくるのはやむをえないといえよう。（略）「会話」の中で、作者は「既成概念」の「寄留する」ところ、「偏見」の「眺める」ところの郷里をたずねられて、語りつくせないものを感じとったにちがいない。「僕」自身のとらえる「僕」と、他者のとらえる「僕」との間に、越えがたい溝をみいだして、それを越えるのにまどろっこしさを意識していた山之口貘氏にとって、「お国は？」と問いかけられて「おきなわ」とすらりと答えてすますことができるのならば、それはむしろ容易なことであったろう。しかし彼はそれをしない。というより彼にはそれができないのである。（略）「会話」というこの詩の「女」との会話はひとつのきっかけにすぎないのであって、そういう一種の自問自答がこの詩の中心となる。「風俗」「習慣」のどれをとりあげてみても、それは「おきなわ」であるのだが、しかしそれだけでは「おきなわ」ではない。それらのすべてをとりあげ、ことごとく言いつくしてしまうことができるのであれば、「おきなわ」をしめすことがあるいはできるかもしれないが、ことごとく言いつくしてしまうことは絶望的に不可能なのである。そういうものとして山之口貘氏にとって「おきなわ」はあるのだ。そしてその「おきなわ」は「僕」の外にあるのではなくて「僕」のうちにある。だから「僕」は「僕の女よ　眼の前に見える亜熱帯が見えないのか！」と自分自身をつき出す以外にないのだ》。

私もこうした氏の視点に大きな魅力を感じる。貘によればこの作品は〈昭和五年ごろ〉の作品だそうだが、[8] 上京してからのヤマトで

の《他者》と《僕》との〝キョリ〟の問題が初期の作品にいくつも見い出だせるからだ。そしてそれが共通して他者との微妙な違和感に彩られているからである。

上京後すぐに遭遇する東京語への戸惑いを書いた「晴天」、結婚願望はあるものの女にくたばるまで打ち振われて街の横づらめがけてなげつけられている男を戯画化した「若しも女を摑んだら」、あるいは行く先々で疎外されている自己の姿を描いた「夢の後」等の初期の作品群を一読されたい。作品の大半はこうした他者との微妙な距離感覚で統一されていることに気づく筈だ。

しかし、ここでこうした指摘以上に、さらに補強強調したいのは、こうした思考のねじれを伴いながらも、「会話」には、ねじれだけではなく、作品そのものの中に機能としての循環装置も内蔵されているのではないか、ということなのだ。つまり、二人の〝会話〟はめぐりめぐって永久的な円還運動（むしろ、虚ろな自問自答）をどこまでも続けて行くであろうということなのだが、言いかえれば、この〝会話〟にはおそらく終わりは来ない、ということである。

すなわち、〈お国は〉と問われて〈ずっとむこう〉と答え、〈ずっとむこうとは〉と問われて〈南方〉と答え、〈南方とは〉と問われて〈亜熱帯〉と答え、〈アネッタイ〉と問われて、結局、〈赤道直下のあの近所〉という答えで作品世界は閉じられ、それに伴って次第に曖昧な〈方角〉が明確な地点を指向しつつクローズ・アップされていくのだが、実を言うと「赤道直下のあの近所」と応じたところで、また、問い詰められ返事に窮して、おそらく、表現をかえて他の言葉でまぎらわすことが予想されるからだ。

いわば、二人の問答はどうどうめぐりに徹し、決して果てることがないように思われるのである。作品内部に機能としての循環装置を認めるゆえんだが、しかし、五〇年代中期の復帰運動高揚期に制作されたいわゆる復帰思想詩には、およそこうした深いねじれと、あるいは、機能としてのこうした複雑なメカニズムはほとんど見られない。「沖縄よどこへ行く」を見てみよう。

Ⅳ　「沖縄よどこへ行く」の世界……
ヤマトと沖縄のはざまで

〈蛇皮線の島／泡盛の島／詩の島／踊りの島／唐手の島／パパイヤにバナナに／九年母などの生る島／蘇鉄や竜舌蘭や榕樹の島／仏桑花や梯梧の真紅の花々の／焔のように燃えさかる島／いま　こうして郷愁に誘われるまま／途方に暮れては／また一行づつ／この詩を綴るこのぼくを生んだ島／いまでは琉球とはその名ばかりのように／むかしの姿はひとつとしてとめるところもなく／島には島とおなじくらいの／舗装道路が這っているという／その舗装道路を歩いて／琉球よ／沖縄よ／こんどはどこへ行くというのだ／おもへばむかし琉球は／日本のものだか／支那のものだか／明っきりしたことはたがいにわかっていなかったという／（略）／それからまもなく／廃藩置県のもとに／ついに琉球は生れかわり／その名を沖縄県と呼ばれながら／三府四十三県の一員として／日本の道をまっすぐに踏み出したのだ／（略）／おもへば廃藩置県この方／七十余年を歩いて来たので／おかげでぼくみたいなものまでも／生活の隅々まで日本語になり／めしを食うにも詩を書くにも泣いたり笑ったり怒ったりするにも／人生のすべてを日本語で生きて来たのだが／戦争な

んてつまらぬことなど／日本の国はしたものだ／それにしても／蛇皮線の島／泡盛の島／沖縄よ／傷はひどく深いときいているのだが／元気になって帰って来ることだ／蛇皮線を忘れずに／泡盛を忘れずに／日本語の／日本に帰って来ることなのだ〉。

五一年九月の対日講和会議締結直前に書かれた作品。一篇を評して藤島宇内氏は《直線的で》《屈折がなく》《啓蒙的でさえある》といい、またそこに《一種の異国情緒に頼るような装飾》があるとも評した。そこにそして作品の《限界》を見ようともした。[9]

藤島のこの評は、作品の内部構造に貘独自の粘着力がないという視点に立っての評だが、作品の内側をもう少し具体的に見てみるなら、第一連から第四連にかけての各連二行または三行書きの鮮烈なイメージの提出、それにつづく第五連終行の〈琉球よ、沖縄よ、こんどはどこへ行くというのだ〉という沖縄へのつよい問いかけ表現、つづく第六連終行の〈戦争なんてつまらぬことなど、日本の国はしたものだ〉という日本の戦争責任を厳しく問いただす表現、そしてさらには作品冒頭のイメージを今一度反復しながら〈日本語の日本に帰って来ることなのだ〉という日本帰属をうったえる最終連終行等には、その背後に郷里沖縄に対するつよい思い、ならびに、〈郷愁に誘われながら途方に暮れている〉作者の沈痛な姿は見い出だせるにしても、表現のベクトルは冒頭から末尾まで「反米復帰」ならぬ日本への心情的一体化志向に支配された「日の丸復帰」の感情に沿ってねじれなく一直線に流れていると判断してもよい。

要するにこの空間は、南島的情緒あるいは琉球への〈郷愁〉に全的に寄りかかりながら過去の風景をことごとく亡くしてしまった故郷琉球への泣き崩れんばかりの、高揚した故郷喪失の感情表現で統一されているということである。それはたとえば、この作品から四年後の一九五六年に発表された「不沈母艦沖縄」[10]にも、また、同様な特徴を指摘できる。

「不沈母艦沖縄」

守礼の門のない沖縄
崇元寺のない沖縄
がじまるの木のない沖縄
梯梧の花の咲かない沖縄
那覇の港に山原船のない沖縄
在京三〇年のぼくのなかの沖縄とは
まるで違った沖縄だという
それでも沖縄からの人だときけば
守礼の門はどうなったかとたずね
崇元寺はどうなのかとたずね
がじまるや梯梧についてたずねたのだ
まもなく戦禍の惨劇から立ち上り
傷だらけの肉体を引きずって
どうやら沖縄が生きのびたところは
不沈母艦沖縄だ
いま八〇万のみじめな生命達が
甲板の片隅に追いつめられていて
鉄やコンクリートの上では
米を作るてだてもなく

死を与えろと叫んでいるのだ

この作品は〝島ぐるみ闘争〟に明け暮れ、軍用地の強制接収や政治的弾圧に動揺する沖縄民衆の主体性の存立の危機をストレートにうったえようとした作品だが、ここにはすべての風景を喪失してしまった故郷沖縄に対する懸念と、それによって喚起された故郷の風景と、そこに生き長らえている沖縄人の惨めな苦しみを、苦悩の眼差しで視つめている一人の詩人の姿があると言えるであろう。

が、冒頭一行目から、つづく五行目の〈那覇の港に山原船のない沖縄〉という部分までの、いわゆる、かつての「琉球風景」を一つの故郷喪失の伝聞的な実感として、ないない尽くしで構成して行くその直線的な書き方や、破壊されてしまったこうした故郷のイメージをさらに引き摺りながら、終行の〈鉄やコンクリートの上では、米を作るてだてもなく、死を与えろと叫んでいるのだ〉という力づよい告発体の文章へと一気に収束して行ってしまうその収束の行程からは表面的な〝怒り〟と故郷喪失の感情は、するどく伝わってはくるにしても、その反面、音調の高い感情のゆえに威勢のよい言葉のみが貘の内なる思考を振り落として単に独り歩きしているように思われるのである。

つまり、〈守礼の門〉〈崇元寺〉〈がじまるの木〉〈梯梧の花〉〈山原船〉という、いわば、琉球のエキゾチシズムに寄りかかりながら、要するに、〈郷愁〉に寄りかかりながら、作品世界が統御されてしまっているということだ。

ただ、「沖縄よどこへ行く」と「不沈母艦沖縄」との間には大きな構造上の相違があると見做してもよいであろう。たとえば、前者の方は、作品の冒頭と末尾に郷愁の風景を配置しながら、その間に琉球の歴史を回想風に嵌め込むという、いわば、A—B—A（またはAB）というサンドイッチ方式を取りつつ最終連での微妙な屈折が見られるからだ。すなわち、〈それにしても、蛇皮線の島、泡盛の島、沖縄よ、傷はひどく深いときいているのだが、元気になって帰って来ることだ。蛇皮線を忘れずに、泡盛を忘れずに、日本語の日本に帰って来ることなのだ〉という基層としての沖縄の文化を保持したまま〈日本語の日本に帰って来ることなのだ〉という、こうした呼びかけの方法の中に、この時点でのおそらく生活の拠点としてのヤマト側に立った貘の、しかしまた自分を生んだ沖縄側にも立って、いわばそのはざまに位置しながらの表現主体の〝かすかなとまどい〟が見られるということである。

そうした意味ではこの最終連の最終行には、むしろ微妙な《直線的》ではない詩人の思考のねじれを読み取ることが可能になろう。このように考えるなら同じ沖縄をテーマにした作品でも「会話」から「沖縄よどこへ行く」、「沖縄よどこへ行く」から「不沈母艦沖縄」への作品変遷過程にはきわめて明確な相違があることが指摘できる。譬えて言えば、「思考」の円環運動から「思考」と「感情」の屈折運動へ、「思考」と「感情」の屈折運動から「感情」の直線運動へという、いわば、三段階の運動形態がここには見られるということである。

すなわち、運動の直線化にともなう「感情」の激烈化、それに反比例して見られる「思考」の後退化の中に、むしろ表現主体の対象へのかかわり方の「希薄さ」を見たいということである。

つまり、沖縄へのかかわり方としては感情的に非常に激しくつよ

いものが見られるものの、ただおそらくそれは外面的なものであり（悪く言えば時代の要求に迎合しているだけであって）自身の内部では実のところ問題の核心を明確に内省化しきれていないのではないか、血液化しきれていないのではないか、そのように判断されるということである。[11] 私はその最も大きな根拠を「沖縄よどこへ行く」の第六連中の歴史的叙述の中に見たいと思う。

この作品の復帰思想詩としての最大の弱点は、沖縄が過去に辿ってきた歴史的背景を踏まえながらも、しかし、その内側に、「なぜ」という疑問符が欠落しているところにあるのではないか。なぜ、沖縄が今度もこうした状況に陥ったのか（陥れられたのか）という基本的な問いを、貘自身は、作品の中でまったく発していないと言ってよい。つまり、日本の国家と政府が沖縄に向き合ってきた向き合い方に対して厳しい対日批判を「沖縄よどこへ行く」は包摂していないのではないか、ということなのである。

要するに貘は、〈蛇皮線〉〈泡盛〉〈パパイア〉〈バナナ〉等の「琉球」の風景に泣き濡れながら、より消極的な形でしか沖縄の日本復帰をうったえることができなかったということであろう。〝沖縄よどこへ行く〟という傍観者的な甘ったるい作品のタイトルはそのことを何よりも証明しているように私には思える。

V 「弾を浴びた島」……沖縄のはざまで

そうした意味では、このようなかかわり方を、あるいは、「感情」に過度に傾斜していたおのれの詩的表現を再度思考の内側にフィード・バックしてより内面化したものとして表出する、そういう再考の機会が五八年十一月の三十四年ぶりの帰郷であった。つまり、沖縄の共同体的な紐帯に深く介入しながら、沖縄とともにどこへ行こうとするのか、沖縄とともにどう歩もうとするのか、そうした自身の在り方を再度確認し直す旅がこの帰郷であったように思われるのである。だが、結論を言えば、結果としてむしろこの帰郷は沖縄とのかかわり方の困難さを（沖縄とのキョリの深さというものを）逆にまざまざと認識させる旅になったように思われる。「弾を浴びた島」を見てみよう。

「弾を浴びた島」

島の土を踏んだとたんに
ガンジューイ[1]とあいさつしたところ
はいおかげさまで元気ですとか言って
島の人は日本語で来たのだ
郷愁はいささか戸惑いしてしまって
ウチナーグチマディン ムル[2]
イクサニ サッタルバスイ[3]と言うと
島の人は苦笑したのだが
沖縄語は上手ですねと来たのだ
（1）お元気か
（2）沖縄方言までもすべて
（3）戦争でやられたのか

沖縄に第一歩を踏み入れた時の〈戸惑い〉を書いた作品だが、テ

クスト上は、琉球方言までも戦争で破壊されてしまった、そのやりきれなさや悲しさを詠じた作品としてとらえることができよう。[12] 事実、貘自身、そのような文章を繰り返し書いていた。

(a) おなじ沖縄とはいってもその出生地によってまた方言があるわけで、たとえば日本語で「元気か」というのを那覇では「ガンジューイ」というのである。それを離島の八重山では「ミサーロールネーラ」という風にである。また言葉はおんなじでもアクセントなどによってもピンと来なかったり、わからなかったりでは互いに不便なことは当然なのであって、だれにも直通して気のおけないのは沖縄にとってもやはり日本語より外にはないからなのである。沖縄語の喪失なのだ。(略) ぼくの眼にはいまや沖縄では日本語のクローズ・アップである。つい三十何年ぶりの郷愁にかられて「ガンジューイ」とこちらからあいさつしたところ、「おかげさまで」と日本語で返される始末なのである。おまけに、貘さんは沖縄語がうまいとからかわれたのである。

——「むかしの沖縄いまの沖縄」

(b) 三十四年ぶりに郷里の沖縄へ行った。船からおりたとたんに、ぼくの口を突いて出たのが沖縄方言で「ガンジューン　アティー」とやった。お元気かとの意なのである。ところが、島の人から「はい、おかげさまで元気です」と、日本語で返されてしまって、はなから郷愁をはぐらかされたのである。(略) もともと外国なのではないのであるから、日本語で来られても当然なのであるが、沖縄生まれのぼくは少年期を沖縄方言で育ってきたのであってみれば、そのことだけでもまるっきり変わってしまった沖縄を感じないではいられなかった。

——「いまはむかしの夢」

(c) 郷里の土を踏んだとたんに、ぼくの口を突いて出たのが沖縄方言なのであった。それがまるで郷愁のかたまりみたいに胸からこみあげて来て、「ハイ　ガンジューン　アティー」とやったのである。すると、相手は「はいおかげさまで元気です」と挨拶を返して来たのであった。ハイ　ガンジューン　アティーのハイというのは〝よう〟とか〝やあ〟とかいうほどの言葉で、ガンジューンは、元気で、アティーはあったかであり、つまり「よう　御元気でしたか」という挨拶なのであって、自分と同世代、あるいは若い世代に対しての使い方である。それでこの場合は、相手はぼくに対して「ハイサイ　ウガンジューン　アイミソーティーサイ」と敬語で来なければならない筈のところ、日本語流に「はい　おかげさまで元気です」と来られたのには、三十四年分のぼくの郷愁が、肩すかしを食ったみたいな感じなのであった。

——「寄り合い世帯の島」

(d) ぼくは、四、五年前に故郷の沖縄に帰ったのだが、ぼくとしては三十四年ぶりだった。その三十四年ぶんの郷愁のなかに、ぼくは沖縄の方言にたいする特別の感情を抱いていた。特に方言について郷愁をもっていたというのは、ぼくが沖縄出身だからだろうと思う。(略) 沖縄に着いたとき、口をついて出たのがその郷愁のかたまりのような方言だった。「ガンジュウンアティ」(ご丈夫でしたか) と、あいさつした。そしたら沖縄の人が「ハイ、おかげさまで元気です」と、まっすぐな日本語で答えたのだ。ぼくは郷愁をそがれるような妙な気がした。

——「消え去った婦人名」

(e)　沖縄語で話しかけたとき、彼女達（「乙姫劇団」の役者たち―松下注）は急に眼をまるくして口を開けて笑ったが、「アキヨ　ウチナーグチ　シッチョーミセーサ。」と誰かが言った。おやおや沖縄語を知っていらっしゃる。というわけなのだ。それで彼女達はほっとしたと言ってくつろいだが、ヤマトグチ（日本語）は彼女達にとって苦手で、本土からの客との応接がつい遠慮がちになるとのことなのであった。

――「沖縄の芸術地図」

琉球方言の喪失とそれに対する〈戸惑い〉が文章の中心部であると見做してよい。仲程昌徳氏も(d)のテクストを引用しつつ帰郷時の貘の最大のショックは方言の消滅に接したときだったと評し、そこにかれの《果てない悲しみ》を見ようとしていた。[13] 列記した文章を通読するなら、たしかにこうした判断は不当ではない。

が、作品の真意は別にあるのではないか。つまり、三十年の間に生じていた郷里の人々との《溝》の問題、すなわち、〝キョリ〟の問題がこの作品の最大のテーマではないのか、そのように考えられるということだ。

言葉としての方言を介して、または、言葉としての日本語を介して、ヤマトに生活の拠点を置きすでにヤマト化されてしまっていた自身と、もはやそのような目でしか見てくれない沖縄で生活している郷里の人との歴然とした〝キョリ〟をまさにこのあいさつの場面で〝実感〟したものとしてこの作品を解釈したいということだ。

作品のタイトルに即して意味付けるなら、〈弾を浴びた〉のは〈島〉そのものではなく、内なる沖縄という「幻想」に過度に寄りかかっていたおのれ自身だったということなのである。

〈ハイ　ガンジューン　アティー〉、あるいは〈ガンジュウンアティ〉とあいさつすれば、おそらく普通は〈ハイサイ　ウガンジューン　アイミソーティーサイ〉と応答が帰ってくるところであろう。あるいはこうした那覇の言葉ではなく、もっと田舎の言葉で〈カナトーミ〉とあいさつすれば、〈カナトーンドウ〉と普通はその応答が帰って来るところであろう。

そしてそれを貘は期待していた。だが現実には、〈はいおかげさまで元気です〉と返される。いわば、共通語としての日本語で応対されたとき〝実感〟したその同郷人との〝心理的な距離感〟、そこにこそこの作品の最大のテーマがあるように思われるのである。

たとえ返された共通語が(a)にしめされるように〈だれにも直通して気のおけない〉言語として出迎えの人の貘に対する一応の敬意をこめた待遇表現であったとしても、だからこそそこにつよい〝心理的な距離感〟を感じたことは容易に想像されるように思われる。

それをしめすのがおそらく(e)の文章ではないか。この文章は帰郷時に沖縄芝居を観劇したときの見聞記だが、劇団の役者たちは貘を〈本土からの客〉として〈遠慮がち〉に見ている。貘が彼女たちに方言で話しかけたとき〈アキヨ　ウチナーグチ　シッチョーミセーサ〉と言って〈くつろいだ〉のはまさにそうした事情を逆に明快に語ってはいまいか。

そしてこのように考えて見るなら、おそらく「会話」の世界もこれとほぼ近似的な世界を保持していたと見てもよい。

一般にこの作品は琉球人に対する世間の偏見がテーマとなっており、こうした琉球人差別の偏見をみごとに対社会的に作品化したものとして理解されてきた。だが、先述した如く私はこの作品をこの

ようには理解してはいない。質問される対象は琉球人でなくてもいいし、誰だっていいからである。あるいは逆に、質問する人もある何かに偏見をもった誰でもいいからである。

つまり、山之口貘がこの作品でもっとも強調せんとしたのは〈会話〉が〈会話〉として成立しえない地点、つまり、〈会話〉する相手との〝心理的な距離感〟、言葉をかえれば〝コミュニケーションの不通〟こそがこの作品の最大のテーマだったと思うのだ。

「会話」というタイトルを作品のそれとして選び取った貘の真意はおそらくそこにあったであろうし、二人の間に交わされるどうどうめぐりの〈会話〉はまさにこうした〝心理的な距離感〟を〝実感〟として認識した結果だったに違いない。

こうしたコンテクストに立って、改めて「弾を浴びた島」を読んで行くなら、やはり、あいさつ形式を取っているこの作品で貘がもっとも強調しようとしたところは、故郷を同じ沖縄にもつ同郷人との〝距離感〟、そこにこそこの作品のテーマがあったことが理解されるのである。

すなわち、沖縄のはざまで孤立し佇んでいるヤマト側にいる人間のもっとも典型的な例をはからずも「弾を浴びた島」は垣間見せてくれたということになろう。

作品最終行の〈沖縄語は上手ですね〉という〈日本語〉によるこのダメ押し的な返事はそうした意味ではあまりにも象徴的表現と言えるようにも思われる。[14]

VI まとめ

ヤマトと沖縄のはざまに位置して、如何なるスタンスで故郷沖縄を貘は見ていたのか、また、沖縄から如何に見られていたのか、以上、「会話」「沖縄よどこへ行く」「不沈母艦沖縄」「弾を浴びた島」を具体的に解読しつつ論じてきた。

まとめて見れば、より消極的な形でしか貘は復帰運動高揚期において沖縄の日本復帰をうったえることができていないということ、また、三十四年ぶりの帰郷が、結局、沖縄と自身との〝キョリ〟をますます深めさせることになったということ、この二点が本稿の主な結論となった。そしてそこに人間関係軸の中で常に対他的な距離感を感じている貘の姿も確認することができた。

貘というと一般に明るく、ユーモラスで、賑やかな人という印象がつよい。が、実際は、人間関係軸の中で常に対他的な距離感を感じながら生活していた詩人ではなかったか。「会話」はヤマト側におけるそれを、「沖縄よどこへ行く」「不沈母艦沖縄」はヤマトと沖縄のはざまにおけるそれを、「弾を浴びた島」は沖縄におけるそれを、それぞれ明快にしめしていたと見てもよい。いずれせよ、ヤマトと沖縄のはざまで宙づりにされているひとりの沖縄出身者の姿がここには明確に浮かび上がっている筈である。

注

(1)〈各国へ『要請文』決議　沖縄問題国民総決起大会〉の記事は当日の具

体的状況をよく伝えている。参照されたい。〈「沖縄を守ろう」のかけ声で全国民を結ぶ「沖縄問題解決国民総決起大会」は薄曇りの四日午後一時半すぎ東京日比谷公園の野外新音楽堂で開かれた。自民、社会の両党をはじめ、労働、青年、文化、宗教、婦人、沖縄関係など四十余りの団体が政治的立場を越え、沖縄問題の解決のため協力し合って開く国民的大集会である。会場正面には「沖縄は日本のものだ。施政権をとりもどそう」「沖縄四原則を全国民の力で貫徹しよう」「沖縄県民をおびやかすプライス勧告反対」「政府は国民の先頭に立て」など五つのスローガンが大きくかかげられ、会場は定刻前から手に手にプラカードや団体旗をもってつめかけた六千人近くの人の群で埋まった〉。

(2) 思潮社版全集未収録。詳細は拙稿「資料　山之口貘―『現代詩』への投稿作品―」(「文献探究」三十三号一九九五年三月) 参照のこと。

(3) 『同化と異化のはざまで』(一九七二年六月潮出版社) 四六ページ「日本人による植民地支配の原型」参照。

(4) 六月二十八日の「朝日新聞」夕刊には〈沖縄代表団の一行　政府・各党に陳情〉〈法以前の人道問題だ〉という見出しで日本政府の立場と考え方を伝える根本官房長官の以下のような記事が掲載されている。〈政府としては沖縄問題に従来から関心を持っていたが、昨年比嘉主席らが米下院の軍事委員会に呼ばれた際の報告で米国が好意的だったと聞いていたし、またダレス米国務長官が去る三月来日したとき、政府が小笠原と沖縄問題について話合った印象でもプライス勧告の線は想像出来なかった。しかし過去はどうであろうと、沖縄問題は同じ日本民族の基本的人権に関する人道上の問題であるから、よく現地の実情を聞いたうえで、政府としては大所から方策を検討したい〉。

(5) 「会話」について管見に入った文献を以下に列記する。⑥以外は主に沖縄民衆の民族的差別感や劣等感を問題にしている。①草野心平「詩の鑑賞」(『現代詩鑑賞講座　3』創元社一九五〇年六月) ②藤島宇内「うむまあ木の背景」(「歴程」67号一九五八年一〇月号) ③比嘉春潮・霜多正次・新里恵二『沖縄』(岩波書店一九六三年一月) ④伊藤信吉「山之口貘の詩―一枚の干物」(「現代詩手帳」一九六三年九月号) ⑤辻淳「漂白の詩人　山之口貘の世界」(「りいぶる」一九六六年五月) ⑥岡本恵徳「苦悶の肖像」(「琉大文学」一九六六年一二月) ⑦大田昌秀『沖縄の民衆意識』(弘文堂新社一九六七年八月) ⑧伊藤信吉「山之口貘」(『現代詩鑑賞講座　8』角川書店一九六九年七月) ⑨仲程昌徳『山之口貘　詩とその軌跡』(法政大学出版局一九七五年九月) ⑩城侑・滝いく子「対談　山之口貘をどう読むか」(「詩人会議」一九八〇年四月号) ⑪三浦健治『思弁の苑』ノート」(「詩人会議」一九八〇年四月号) ⑫竹内清己「山之口貘論」(「解釈と鑑賞」一九八二年八月)。

(6) 作品の執筆動機等については以下の文章に詳しい。①「天国ビルの斎藤さん」(「中央公論」一九三九年一月号) ②「スフに就いて」(「都新聞」一九四一年三月二日号) ③「自作解説　会話」(「現代詩」一九五五年五月号) ④「沖縄悲歌」(「新潮」一九五六年一一月号) ⑤「ぼくの半生記」(「沖縄タイムス」一九五八年一一月二五日号―一二月一四日号) ⑥「私の青年時代」(「社会人」一九六三年四月号)。③は思潮社版全集未収録。詳細は拙稿「資料　山之口貘―『現代詩』への投稿作品―」(「文献探究」三十三号一九九五年三月) 参照のこと。

(7) 岡本恵徳「苦悶の肖像」(「琉大文学」一九六六年一二月⇒『現代沖縄の文学と思想』一九八一年七月沖縄タイムス社再録)。

(8) 「自作解説　会話」(「現代詩」一九五五年五月号) には〈この詩は、郷里の沖縄を出てから、六年目あたりの昭和五年ごろの作品である〉と記されている。注 (1) の拙稿参照のこと。

(9) 藤島宇内「うむまあ木の背景」(「歴程」67号一九五八年一〇月号)。

(10) 詳細は拙稿「資料　山之口貘―火野葦平作『戯曲　ちぎられた縄』パンフレット掲載作品」(「文献探究」二十七号一九九一年三月) 参照のこと。

(11) 私見を補強する意味で評論「沖縄よどこへ行く」(「政界往来」一九六二年九月号) から以下の文章を引用しておきたい。ここには帰郷時まで「観念的」にしか沖縄をとらえていなかったことがのべられている。

〈三十四年ぶりの帰省とは言っても、沖縄の変り方は、日本の敗戦を抜きにしては、到底考えられない変り方であることに、おどろかないではいられなかった。それまでのぼくは、新聞や雑誌の上で、敗戦後の沖縄を観念的に知っていたにすぎず、知っていたというよりは想像していたにすぎなかったし、たまには沖縄から上京した人の話を通じて、沖縄の変貌の様子を知ったつもりなのであったが、それも知った感じがしたにすぎないのであって、その変り方は沖縄生れのぼくを、はなから戸惑いさせたほど、根こそぎに変ってしまったのである〉。

(12) (a)〜(e)の文章と一部重なるが以下の文章を参照されたい。「むかしの沖縄いまの沖縄」(「琉球新報」一九五九年三月一四日号)「石垣島紀行」(「毎日新聞」一九五九年三月二九日号)「沖縄はわが故郷」(「小学4年生」一九五九年六月号)「沖縄の芸術地図」(「芸術新潮」一九五九年八月号)「白・黒の精進あげ」(「大法輪」一九六〇年一月号)「いまはむかしの夢」(「産経新聞」一九六一年一一月五日号)「おきなわやまとぐち」(「朝日新聞」一九六二年三月三〇日号)「寄り合い世帯の島」(「友愛」一九六二年八月号)「沖縄よどこへ行く」(「政界往来」一九六二年九月号)「消え去った婦人名」(「太陽」一九六三年九月号)。

(13) 仲程昌徳『山之口貘　詩とその軌跡』(法政大学出版局一九七五年九月)二二六ページ参照。

(14) これについては牧港篤三「山之口貘と泊港」(『幻想の街・那覇』新宿書房一九八六年十一月)も参照されたい。

〔付記〕本稿は昨年の六月十二日に早稲田大学で開かれた日本社会文学会春季大会で口頭発表した資料をもとに書き上げたものである。また、「『沖縄よどこへ行く』論—山之口貘と沖縄(1)—」(「筑紫国文」十六号一九九三年六月)「許南麒の朝鮮・山之口貘の沖縄—傍観者のまなざし—」(「敍説」十一号一九九五年一月)の総括稿にも当たる。内容に一部の重複があることを諒解されたい。